福翁百話（七十五）

富者必ずしも快樂多からず

福澤諭吉

貧乏は淺ましく宜しからず家に財産なくして他人の厄介と爲るは第一獨立の大義に戻るのみならず朝夕の不自由は何とも名狀す可らざる程の苦しみにして之が爲めには人物も强に返り人相までも變るもの多し聽に四百四病の中に貧ほど憂きものはなしと言ふも決して過ぎたる言に非ず左れば貧乏の苦界を免かれて富貴安樂の身に爲らんとするは人生普通の欲心にして浮世の萬人は萬人皆みの欲心に支配せらるゝものなりと言ふも不可なきが如し然るに今富有と貧乏と兩樣相對して富有の身は貧乏の苦しきが如く正しく其割合に樂しきものなるやと尋ねれば亦決して然らず貧乏の苦痛は殆んど際限あるみとなく遂に身を殺すまでに至る可しと雖も富有の快樂は斯の如く身に切なるを得ず私有財産の勢力は單に貧苦を賠して心身を安樂ならしむるに止まり其以上は假令ひ何程の富を重ぬるも一身に直接の用なく其富は唯萬一の時に貴重を防ぐの用意にして之を喩へば身に經ひもせぬ衣裳を幾枚となく箪笥の引出しに藏めて實際の用不用に拘はらず時々もの衣裳を見て獨り自から安心するものゝ如し嘗て千圓の人と萬圓の人と其苦樂如何を問へば双方共に既に飢寒を免かれたる上は假令ひ何程の富を重ぬるも一身に直接の用なく其富は唯萬一の時に貴重を防ぐの用意にして之を喩へば身に經ひもせぬ衣裳を幾枚となく箪笥の引出しに藏めて實際の用不用に拘はらず時々もの衣裳を見て獨り自から安心するものゝ如し嘗て千圓の人と萬圓の人と其苦樂如何を問へば双方共に既に飢寒を免かれたる上は日常衣食の物として實際に甚だしき相違あるに非ず或は其以上に上りて奢侈を恣にするに至れば一年に五萬圓も十萬圓も費す可けれども十萬を費す人の快樂は歲費千圓の人に比して百倍ならざるのみか時としては其快樂に伴ふに一種言ふ可らざるの苦痛を以てし昔時相半して唯空しく金を費るのみの事實は浮世の常なり左れば天下古今の殖産家が頻りに貯蓄に熱心して殆んど底止する所を知らざるは僅に貧苦を免かるゝの樂に非ず資産の勢力に由りて威福を行ひ一擲一笑以て他を喜憂せしめんとするの功名心にして其經營の辛苦は學者の苦吟、宗教家の苦修、政治家の遠略に等しく單に生足るを知らずして求ずる者と云ふ可し嘗て貧乏人は此惰を解するみと能はず他は昔の反對なりと信じて貧富と富樂と兩々相對し總に比例して苦樂の度を測量せんとするは畢竟貧界に居て富界の情を知らざるの弊なり彼の清貧に安んずるが如きは愚者の事にして圖より取るに足らざれども苟も衣食既に不足なき以上は安心快樂の法必ずしも錢に在らず士君子の自から其身の長所を省みて自から工夫す可き所のものなり

社說

議會の爭點

議會開場の曉には進歩黨自由の兩黨は野に立分れて相爭ふみとならんが其爭點は何れに在るやと云ふに今日までの所にては內閣の死活を定むるほどの問題もなきが由來の議會に於て黨同黨氏の[illegible]府は今[illegible]大[illegible]

[illegible]

[illegible]